

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	親鸞像の形成と展開過程
Title(English)	Formation and development process of the image of Shinran
著者(和文)	大澤絢子
Author(English)	Ayako Osawa
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10385号, 授与年月日:2016年12月31日, 学位の種別:課程博士, 審査員:戦 暁梅,伊藤 亜紗,桑子 敏雄,劉 岸偉,弓山 達也,橋爪 大三郎,本 多 弘之
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10385号, Conferred date:2016/12/31, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名	大澤 絢子	
		氏名	職名	氏名	職名
論文審査 審査員	主査	戦 暁梅	准教授	弓山 達也	教授
	審査員	伊藤 亜紗	准教授	橋爪 大三郎	東工大名誉教授
		桑子 敏雄	教授	本多 弘之	親鸞仏教 センター所長
		劉 岸偉	教授		

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は浄土真宗の宗祖親鸞（1173～1263）のイメージ、すなわち「親鸞像」の形成およびその展開過程を明らかにすることを目的としている。親鸞の生涯を描いた絵巻物「親鸞伝絵」（以下「伝絵」）や、伝記、文学作品などのテキストを精密に考察、分析することにより、語る者の意図、宗派意識、近代における親鸞像の変容、マス・メディアへの登場という四つの要素に注目して、以下の七章構成で論を展開した。

序章では、本論文の目的と背景、先行研究、論文の構成と研究方法を示している。

第1章「親鸞像の創出——覚如による「三代伝持」の表明と康永本「親鸞伝絵」——」では、親鸞のひ孫覚如が在世中に制作された現存する「伝絵」五本のうち、「康永本」と呼ばれる康永二年（1343）の『本願寺聖人伝絵』における親鸞像の形成の意義を検討した。その結果、親鸞を顕彰することを目的として制作される「伝絵」のうち、特に「康永本」は、留守職に就任した覚如が教義の明確化および本願寺を中心とした信仰の形成に力を注いでいくなかで制作されたものであることが明らかになり、また、これによって、覚如が表明した「三代伝持」は、親鸞から覚如自身へ連なる法脈の宣言でありつつ、法灯継承者としての覚如と本願寺の正統性を主張するための論理構成であったことを指摘した。

第2章「康永本「親鸞伝絵」における親鸞像の形成——琳阿本・高田本との絵相比較より——」では、具体的に「康永本」に描かれた絵相をそれまでの代表的な「伝絵」であった「琳阿本」(『善信聖人絵』)および「高田本」(『善信聖人親鸞伝絵』)と比較することによって、「康永本」に反映された覚如の意図および親鸞像の変化を明らかにした。「康永本」には、法然と親鸞の教義的立場の同一性を強調し、真宗の教義的立場を明確にする描写、僧俗における親鸞の人気と存在感を強調する描写、および本願寺と親鸞との関係を強固なものとする描写が見られ、法然の法脈を継ぐ正統な弟子・親鸞、僧俗に教えを弘め、僧俗に慕われた親鸞、および本願寺の親鸞という性格づけがなされていた。「康永本」は、宗祖である親鸞を顕彰する性質を保ちつつも、著作において表明されていた覚如の主張を巧みに組み込んだ上で親鸞像が展開されていることを明らかにした。

第3章「妻帯した」親鸞像の構築——江戸期における僧侶の妻帯の厳罰化と親鸞伝の言説をめぐって——」では、江戸幕府による寺院統制による宗派意識の中で「妻帯した親鸞」像が構築されていく過程を明らかにした。本章では、江戸期における画一的寺院統制下において僧侶の女犯や妻帯が厳罰化していくなかで例外的に妻帯が認められていた真宗が、宗祖である親鸞が「妻帯した」という言説をいかに確立していったのかを検討した。

江戸期以前に親鸞の妻帯を記した親鸞伝は少ないものにも関わらず、江戸期の親鸞伝はそれ以前の親鸞伝を引く形でおよそその親鸞伝にも親鸞の「妻帯」が語られる。さらに江戸期に親鸞伝においては親鸞の「妻帯」の正当性が強調され、次第に宗風の起源として主張されることを明らかにした。

第4章「浩々洞洞人による『歎異抄』読解と親鸞像——倉田百三『出家とその弟子』への継承と相違——」では、親鸞の弟子・唯円による書とされる『歎異抄』を素材とした文学作品、倉田百三の『出家とその弟子』と近代における『歎異抄』読解との連続性と相違を論じた。暁鳥敏をはじめとする浩々洞洞人による『歎異抄』の読みとは、自己の罪悪の自覚を契機とした「絶対他力」の姿勢であり、それが彼らの親鸞像にも色濃く現れている。そのように自己の愚かさや罪悪を吐露する親鸞は、「如来の化身」として親鸞を語ってきた「伝絵」とは差異があり、『出家とその弟子』における親鸞像とも重なる点も多い。だがこの親鸞は、あくまでも自己の善を高めようと志向するにおいて、彼らのものとは大きく相違することを明らかにし、近代における読書形態の変化も相俟って、語る者による私的な親鸞像が展開されていくことを明らかにした。

第5章「親鸞像の大衆化——新聞小説のなかの親鸞像——」では、『出家とその弟子』に次いでいち早く新聞小説として親鸞を描いた石丸梧平の作品を分析した。石丸は独自の人生観によって親鸞を取り上げた作家であるが、彼の作品は新聞がマス・メディアとして大規模化していきなかに日刊紙への連載という形で発表されている。倉田が性や生の問題を、宗教的なものへ昇華させることを目指す親鸞像を展開したのに対し、石丸の描いた親鸞はひたすら現実の問題に悩み、いかに生きるかを課題とする親鸞である。ここには、個としての成長を重視する大正期の思潮との関連が見受けられ、親鸞が時代思潮を取り込みながらの不特定多数の読者に提供されていくことによって「人間親鸞」の新たな側面を見出すことができることを指摘した。

終章では、これまでの各章をまとめ、結論と今後の課題について述べている。

以上、要するにゆるぎない絶対的な信仰の対象という宗祖親鸞のイメージは、浄土真宗の教団内部において「伝絵」として創出されたあと、語るものの意図によって変容し、また社会的要因によって、さまざまに形を変えて文学やマス・メディアを通じて教団外の日本社会へと浸透していった。複数の分野にまたがる膨大な資料や作品を丁寧に紐解いてこの親鸞像の創出や展開の過程を明らかにした本論文は、従来の宗教史研究にとどまることなく、文化史や日本研究の分野においても大きく寄与するもので、博士(学術)の学位を授与するにまことに相応しいと言える。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。